

世界に目を向けて

藤岡市立小野中学校

三年 下風 沙都

私は、腹を立てていた。今、私の目の前で起きることが理解できなかった。

「うわ、まっずい」と言っつて、平気な顔で食べ物を捨てている人。

「勉強なんかしたつて、意味ねえよな」と言っつて、学習に取り組まない人。こんなにも、勉強をする環境が整っているにも関わらず。私は、「なぜこの人達はこんなことができるんだらう。」と不思議で仕方なかった。そして、「この光景をあの子達が見たら、何を思うんだらう。」と思った。

「あの子達」というのは、私がマレーシアで暮らしていたときに見た、子供達のことだ。私が家族と訪れた東南アジアの多くの国々には、学校に行かずに働い

ている子供がたくさんいる。いや、彼らは学校に「行かない」のではなく「行けない」のだ。経済的に余裕がなく、毎日必死に働かなければ生活していくことができない。皆さんも、そんな光景をテレビや新聞で目にしたことがあるかもしれない。しかし、実際に見たときに私が受けたショックは相当なものだった。中でも鮮明に覚えている記憶がある。

小学校三年生の時、家族でカンボジアに行った。カンボジアでは働く子供達の姿がどの国よりも多く見られた。私たちが遺跡を見て回り、疲れてレストランに入ろうとしたときのことだ。子供達が私のところに来て口々に言った。

「お願いします。買ってください。」

「安いよ、安いよ。」

私はどうすることもできず、うつむいてレストランに入った。慣れない日本語を使って必死に商品を売る彼らの姿は、私の目に焼き付いて離れなかった。観光を楽しむ、涼しいレストランで家族と食事をする私があった。その隣には、炎天下の中食事もとらずに必死に

働く子供達がいた。これと同じことが今、世界中で起きています。

現在、新型コロナウイルスによって世界が大混乱に陥っている。開発されたワクチンは先進国が独占し、発展途上国では数百万人もの人々が順番を待ちながら命を落としている。南アフリカの大統領はこれを「ワクチンアパルトヘイトだ」と言った。そう、これは発展途上国に対する差別と言っても過言ではないと思う。先進国が富を分かち合わないばかりに、数百万人もの人々が犠牲になっている。現実には残酷だ。

では、私にいったい何ができるのだろう。実際、私一人の力では小さすぎてこの大きな問題をどうすることもできない。そこで私はまず、最初にこの現実を伝えることにする。私が世界に目を向けたとき、何に気づき、私の中で何が変わったのか。

私は身の回りに小さな幸せを見つけられることができる。あの日彼らが「私は恵まれていて、幸せだ」と気づかせてくれたから。学校に行き勉強できる幸せ。ご飯を食べられる幸せ。世界に目を向けたとき私が知ったのは、

残酷な現実と小さな幸せの数々だった。私は、世界中の飢えに苦しむ子供達を思うと、食べ物を簡単に捨てることなんてできない。学校に行けない彼らを思うと、私は勉強をすることが幸せで好きだと思うようになった。

もっと広く世界に目を向けてほしい。きっと、助けを求めている人たちがいることに気づくはずだ。さらに、今まで気づかなかった身の回りにある幸せに気づくだろう。そして、その気づきを周りの人に伝えてほしい。私が起こした小さな波がみんなの力でいつか大きな波となり、世界中の働く子供達がいなくなることを私は願う。